

イベント等における民俗芸能の
公開に関する調査報告

—

宮田 繁幸

はじめに

調査の趣旨・目的

調査の手順・手法

調査の概要

現地実態確認調査

主催者面談調査

出演者アンケート調査

はじめに

民俗芸能研究室では、平成十三年度より「民俗芸能の上演目的や上演場所の調査研究」を実施しているが、その一つの柱として行っているのが、民俗芸能の本来の公開の場以外での公開についての実態調査である。この調査は、五カ年の予定で進められており、もう一つの柱である「歴史的意義の解明が不十分な民俗芸能の調査研究」と併せて、最終年度（平成十七年度）に報告書としてまとめることとしている。今回の報告は、その最終報告書に至るまでの中間的なものであり、昨年度（平成十三年度）及び今年度の調査に関する客観的な実施報告的なものであることを了解されたい。

調査の趣旨・目的

民俗芸能において、祭礼や年中行事と結びついた伝承地での本来の公開（以下これを現地公開という）が最も重んぜられるものであり、文化財指定の場合においても、現状の現地公開の姿を確認することが必須条件である。

しかし一方で、民俗芸能大会、フェスティバル、など現地公開とは異なつた民俗芸能の上演イベントも少なくない。そこには、文化庁や各都道府県教育委員会といった文化財保護当局がイニシャチブをとるものから、観光イベントの一環として行われるものまで、幅広い性格のものがあり、また規模においても一地方レベルから国際的な催しまで多様な展開が見られる。

本調査では、今やイベント等での公開が民俗芸能にとって現地公開と並んで重要な公開機会となつているという認識に基づき、その実態把握を目的とする。そして、得られた資料を基にこうした現地公開以外の公開のあり方を考察

し、民俗芸能保護・発展の立場から、あるべきイベント等の姿を探ることを目指す。

調査の手順・手法

本調査では、民俗芸能の公開イベントを、当該地域の民俗芸能が出演の中心となる「地域主導型」、外国の芸能と併せて民俗芸能を公開する「国際型」（海外主体と日本主体にさらに分けられる）、出演民俗芸能の範囲が全国に及ぶ「全国型」に分け、さらに文化財保護・啓蒙、文化交流、産業・観光振興など主たる目的により類別し、それらの中から調査対象を選んだ。そしてそれらの対象に対して、現地実態確認、出演者・主催者に対する面談調査、出演団体に対するアンケート調査、を実施することをおもな調査手法とした。

調査の概要

調査対象イベント

平成十三年度

「第四十回 北上みちのく芸能まつり」

「堺国際芸術芸能フェスティバル」

「地域伝統芸能全国フェスティバル静岡大会」

「全国民俗芸能大会」

平成十四年度

「第四十一回 北上みちのく芸能まつり」

「堺国際芸術芸能フェスティバル」

「地域伝統芸能全国フェスティバル富山大会」

「平成十四年度国際民俗芸能フェスティバル（静岡市・高山市）」

「中国・四国ブロック民俗芸能大会」

「全国民俗芸能大会」

これらの対象の内、「北上みちのく芸能まつり」に関しては、現地実態確認・主催者面談調査・出演団体へのアンケート調査、「堺国際芸術芸能フェスティバル」については、現地実態確認・主催者面談調査、また「地域伝統芸能全国フェスティバル」については、一部出演芸能の現地公開状況確認・同芸能関係者に対する面談調査及び大会の現地実態調査、といった複合的詳細調査を実施し、他対象に関しては現地実態調査を中心に情報を収集した。以下現時点で最も調査データを多く収集できた「北上みちのく芸能まつり」の調査結果について、その概要を報告する。

「北上みちのく芸能まつり」

このイベントを調査対象に選定したのは、地域主導型民俗芸能イベントとして四十年以上の歴史を持ちイベントとしての定着度が高いことと、一〇〇余りの団体が出演しているため、出演者に対するアンケート調査でも有効なデータが得られるであろうと判断したためである。

現地実態確認調査

実施日時：平成十三年八月七日～九日

この年の「北上みちのく芸能まつり」は、第四十回という記念の大会であったため、例年の芸能発表の他、初日の冒頭に北上駅西口広場会場において「民俗芸能シンポジウム」として、三隅治雄氏の講演「芸能伝承とみちのく芸能まつりの役割」や座談会「みちのく芸能まつりを顧みる」といった記念企画が催された。また北上市のタウン情報誌『ダ・ダ・スコ』にも、「みちのく芸能まつりの軌跡」という特集記事が生まれ、併せてこの催しの現在に至るまでの変遷についての情報を集中的に得ることが出来た。その変遷をまとめると以下の通りである。
変遷の概略

昭和三十七年（第一回）参加二十一団体

岩手県・岩手県観光連盟・北上市の共催事業。地元の伝統行事である八月十六日の「燈籠流し」と同日に北上商業高校（現専修大学北上高校）の校庭を会場として実施された。

昭和三十九年（第三回）参加十五団体

竣工した北上市民会館ホールを会場として開催。日時は近隣の主要夏祭り（「竿灯」「ねぶた」「七夕」など）のシーズンにあわせ、八月七日に変更。

昭和四十四年（第八回）参加二十三団体

実行委員会を主体とする運営組織を整備。開催日を八月十五・十六日とし、初日を市民参加の「さんさ踊りパレード」中心、二日目を民俗芸能公演及び燈籠流しの日として構成。会場は市内四箇所同時公演。

昭和四十九年（第十三回）参加四十四団体

当時の国鉄より、「東北六大祭り」の一つとして指定を受ける。

昭和五十年（第十四回）参加五十団体

名称を現行の「北上・みちのく芸能まつり」とする。

昭和五十七年（第二十一回）参加七十二団体

東北新幹線開通。日程を八月十四日から十六日の三日間とする。

昭和五十八年（第二十二回）参加七十六団体

開催日程を八月七日、九日に変更（現在に至る）。

昭和五十九年（第二十三回）参加六十九団体

東北地方以外から初めての民俗芸能として、愛媛県宇和島市より「牛鬼」を招聘。

昭和六十三年（第二十七回）参加六十四団体

海外からの初めての民俗芸能として、中国雲南省の少数民族舞踊団を招聘。

平成七年（第三十四回）参加百十四団体

この年、五月に高松市で開催された「第三回地域伝統芸能全国フェスティバル」で、「地域伝統芸能大賞」を受賞。民俗芸能の後継者団体として、保育園児・小中学生中心の団体の参加始まる。

平成八年（第三十五回）参加百二十一団体

主会場を市役所前通りから駅前大通りに変更（現在に至る）。

第四十回について

平成十三年度の第四十回では、北上市内から七十五団体（うち小中学生等の後継者団体十）、北上市以外の岩手県内から三十六団体（県北三、北沿岸五、県央七、県南十五、南沿岸一、和賀郡内五）、岩手県外から九団体（北

海道、青森、宮城、福島、秋田、山形、東京、岐阜、京都各一、海外から一団体（中国河南省 三門峡豫劇団）合計百二十一の芸能団体が参加した。会場としては、駅前大通りのメイン会場であるお祭り広場会場、北上駅西口会場、諏訪神社会場、詩歌の森公園会場、商店街会場、市民会館会場の六会場が使用された。このうちメイン会場であるお祭り広場は、道路通行止めの措置を執りスペースを確保したもので、夜間の公開に使用され、さらにその中を七つの会場に分けて多様な芸能が演じられた。また、その他の五会場は昼間の公開に使用された。ほぼ各会場同時進行の形で芸能が公開されるため、すべてを見学するのは不可能であるが、各会場毎に役割付けがされており、見学者の興味で効率よく鑑賞できる工夫がなされていた。

すなわち、北上駅西口会場は、北上市の窓口として市外からの観光客を迎える役割を担い、前記のシンポジウムその他、解説付き芸能の実演などのプログラムが組まれ、鹿踊・鬼剣舞といった当地を代表する民俗芸能への導入会場の位置づけであった。

諏訪神社会場は、神社境内に神楽用の舞台を組み、神楽専門の公演会場として位置付けられ、述べ二十七回の神楽公開が行われた。

詩歌の森公演会場は、広い芝生の庭園というスペースをそのまま生かし、鬼剣舞・鹿踊の専用会場とされ、十三団体の芸能が披露された。

商店街会場は、ショッピングセンター入り口前に設置され、「ショッピングを楽しみながらの芸能鑑賞」をうたい、保育園児や小中学生の団体を含む多様な芸能がのべ二十二回に渡って公開された。

市民会館会場は、唯一の屋内舞台であり、かつ有料会場（前売り三百円、当日五百円）として設定されており、出演十団体のうち海外を含む八団体が北上市外とされ、北上市民に広く他の芸能をじっくりと鑑賞できる場として提供されていた。

芸能公演の場としてこの催しを見る場合、市民会館及び特設ステージが設けられた北上駅西口会場を除いて、路上や広場といった観客との同一平面上での会場設定が多く、より本来の公開に近い雰囲気を感じ出すための配慮が感じられる。事実、客席から舞台を見る通常の芸能大会に比べ、見る者と演じる者の距離はきわめて近く、同一の「まつり」の空間にいるという一体感の創出に成功しているといつてよいだろう。もちろん、舞台上の芸能を見る場合と違って、見る側の場所によっては見えにくい場合もあるし、また天候の変化にも左右されるといった運営上の困難さもあるが、より自然な形で芸能を見せるということでは、効果的なやり方であると感じられた。

主催者面談調査

実施日時 平成十四一月二十八日

「北上みちのく芸能まつり」の主催者側関係者である北上市商工部観光物産課及び北上市観光協会の担当者に面談し、本事業の、運営・実行組織、事業費、事業の評価、今後の構想等について調査を実施した。その概要は以下の通りである。

運営・実行組織

本事業の運営・実行に係わる組織としては、「北上みちのく芸能まつり運営委員会（以下運営委員会という）」と「北上みちのく芸能まつり実行委員会（以下実行委員会という）」の二組織がある。

運営委員会は、名誉会長に北上市長、会長に北上観光協会長、副会長に北上市商工会議所会頭及び北上市教育委員会教育長を配し、以下委員は商工会・観光協会・商工会議所・市議会・商店街振興組合・青年団体連合会・婦人団体協議会・青年会議所・農業協同組合・警察・JR等交通関係の役職者と、北上民俗芸能保存会会長および知

識経験者により構成される（定数四十名以内）。運営委員会で決定される事項は、「まつりの基本計画」「まつりの予算及び決算に関すること」「委員会規約に関すること」「実行委員会の設置及び要項に関すること」「実行委員長を選任にすること」「まつり全般の総合調整に関すること」「その他、会長が必要と認めること」となっており、本事業の最終意思決定機関である。なお事務所は北上市役所内に置かれ、事務局員は商工部観光物産課・観光協会・商工会議所・教育委員会の職員があたり、観光物産課長が事務局長、観光協会事務局長・商工会議所事務局長・教育委員会社会教育課長が事務局次長となっている。以上から、この運営委員会は北上市の公的な組織を代表し、このまつりの全体を統括するものであるといえる。

次に実行委員会は、前記の運営委員会の規約に基づき設置されるもので、その委員は運営委員会会長より委嘱される。その任務は、「運営委員会の決定に基づくまつりの実施に関すること」「行事の構成と演出に関すること」「行事会場の設営及び交通に関すること」「行事の宣伝啓発及び観光客の受け入れ体制に関すること」「その他必要な事項」となっており、その年々の実施の責任を担う組織である。この委員会には、「総務部会」「芸能部会」「流灯部会」「花火部会」「交通部会」「宣伝部会」「市民パレード部会」「みこし部会」の八部会が置かれ、それぞれ二十名程度の市民ボランティアが委員として委嘱され部会業務に当たる。このうちの芸能部会の業務内容を見ると、「芸能団体に關すること（選定、要請、連絡等）」「芸能公演の進行に關すること（企画、演出、時間調整、場内設備等）」「各公演会場の設営に關すること（舞台装置、照明、放送設備等）」「梵灯行事に關すること」「その他」となっている。なお実行委員会の事務局は北上市観光協会内に置かれ、観光協会・観光物産課・商工会議所の職員が事務にあたる。

事業の評価

本事業の主催者側の評価としては、次のような意見が得られた。

(一) 観光事業としての評価

北上市の代表的観光行事としてすっかり定着した。観客も半数は市外からと見られる。この催し期間中の経済的波及効果もさることながら、芸能まつりをテコとして北上市のネームバリューをあげるといふ目的は十分達成されている。

(二) 民俗芸能保護の観点からの評価

同種芸能団体との競演の機会により、伝承意欲及び技芸錬磨に対するよい刺激となっている。また、後継者団体の参加など、青少年に民俗芸能に対する関心を持つてもらおう機会としても有効である。

今後の構想

基本的には、市民参加型の催し、自然な形でのもつりの場の提供、といったこれまでの路線を継承していくが、さらに年間を通じて芸能の伝承・公開に資するような施設等も考えていきたい。

出演者アンケート調査

平成十四年度の調査として、イベントに出演した芸能団体側の意識を把握するため、第四十回(平成十三年度)・第四十一回(平成十四年度)の「北上みちのく芸能まつり」出演団体のうち、海外招聘団体を除いた述べ百三十三団体に對してアンケート調査を実施した。アンケートは、東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室長名で、各出演団体代表者宛(北上みちのく芸能まつり実行委員会発行『北上みちのく芸能まつり 出演芸能の解説』に記載された「出演芸能団体 代表者の住所・氏名」によつた)に依頼文書とアンケート用紙を直接送付し回答を依頼した。百三十三件のうち回答のあつたものは六十六件であり、回答率はほぼ五十%となつた。

送付したアンケート用紙は、次頁の通りである。

調 査 票 平 成 年 月 日

記入者御氏名()

1 名称(地元で使用する芸能・行事名称をお書き下さい)

2 所在地,開催期日及び開催場所

(1) 伝承者の所在地

(2) 芸能・行事の開催期日

イ 定期的に行われる場合

ロ 不定期に行われる場合(主に行われる行事等をお書き下さい)

近年(ここ10年くらい)に期日の変更のあった場合には、その経過を御記入下さい。(例:
5年前より 月 日から 月の第3日曜に変更)

(3) 通常の芸能・行事の開催場所(社寺境内,街路等具体的に御記入下さい)

3 保護団体

(1) 名称

(2) 所在地

(3) 代表者御氏名

(4) 会員数

4 大会出演に関して

(1) これまでの大会出演回数(平成14年度まで)

回

(2) この大会以外の外部出演経験(該当する箇所に をお付け下さい)

・ ある
行事名:

時期:

・ ない

(裏面へ)

129 イベント等における民俗芸能の公開に関する調査 一

(3) 今回の出演に関して

出演することによる影響（該当する箇所に をお付け下さい 複数可）

- ・ 通常の演技より時間を短縮して演じた
- ・ 演技内容の再構成を行った
- ・ 通常の演技と時間・内容とも同じであった
- ・ その他（自由にお書き下さい）

出演して感じたメリット・デメリット（該当する箇所に をお付け下さい 複数可）

メリット

- ・ 伝承意欲の向上
- ・ 練習を積むことによる演技の向上
- ・ 他団体との交流による刺激
- ・ その他（自由にお書き下さい）

デメリット

- ・ 練習の負担が大きい
- ・ 本来の公開が影響を受けた
- ・ 経済的負担が大きい
- ・ その他（自由にお書き下さい）

今後の方針（該当する箇所に をお付け下さい）

- ・ 今後も積極的に出演したい
- ・ 依頼があれば出演したい
- ・ 今後の出演には消極的だ
- ・ その他（自由にお書き下さい）

アンケート結果のまとめ

対象団体内訳

対象団体のうち、北上市の団体は八十二団体、市外は五十一団体。北上市の団体には保育園から高校生までの後継者養成団体を十二含む。また、市外については、岩手県内が四十、県外が十一団体でその中に東京・京都・札幌の鬼剣舞グループ三団体を含む。

回答数内訳

全体の回答六十六件の内訳は、北上市内三十三件で回答率約四十%、市外三十三件で回答率約六十五%であり、市外からの出演団体からの回答率の方がかなり高くなっている。

回答項目別概要

大会出演回数

十回以下 二十四

十回～二十回 十二

二十回～三十回 十一

三十回以上 八

無効回答 三(四十一回以上の回答)

無回答 八

他大会出演経験

あり 五十七

なし 四

無回答 五

出演することによる影響（複数回答可）

通常の演技より時間を短縮して演じた 二十七

演技内容の再構成を行った 十八

通常の演技と時間・内容とも同じであった 三十

その他 五

出演して感じたメリット（複数回答可）

伝承意欲の向上 四十六

練習を積むことによる演技の向上 四十二

他団体との交流による刺激 四十

その他 八（自分の団体のネームバリューの向上、師匠団体との交流、教育的効果等）

出演して感じたデメリット（複数回答可）

練習の負担が大きい 十七

本来の公開が影響を受けた 三

経済的負担が大きい 二十二

その他 十一（仕事のやりくりが大変、本来の公開の場と環境が違いすぎる、人員確保に苦労等）

出演に関する今後の方針（複数回答は想定外であったが、現実には複数回答あり）

今後も積極的に出演したい 三十六

依頼があれば出演したい 三十三

今後の出演には消極的だ 四

その他 十一（出費用捻出に苦慮、学校の統廃合により今後の活動を再検討中等）

無効回答 一（積極的と消極的双方に）

以上のアンケート結果の分析は、今後他イベントの調査データとも併せて詳細に行う必要があるが、少なくとも十六回答中、「今後の出演には消極的だ」との回答が四件しかなかったのは注目すべきであろう。もちろん、こうしたアンケートに積極的に応じてくれた団体は、この大会に対する意識・関心が元々高く、約半数の未回答団体では今後の出演に消極的という比率がこれよりも高くなるかもしれないが、全体としての比率を大きく動かすことになるとは考えにくい。出演団体側のこうした大会出演に対する姿勢を、ある程度まとまった形で把握出来たことは有意義であったと考えている。

今後の調査方針

五カ年計画の今後の調査方針としては、はじめに掲げた民俗芸能のイベント形態別に個別調査を継続するとともに、全国のこうしたイベントの総体的把握を目的に、網羅的調査にも着手する予定である。そしてこれらの結果をふまえて最終年度に最終報告書としてその成果を問いたい。

【Summary】

Report of the research about the presentation of folk
performing arts in festivals

Miyata Shigeyuki

Our folk performing arts section have been carrying out the project “Research on Purpose and Location of Folk Performing Arts” since 2001. One of the themes of this project is “Research about the presentation of folk performing arts in festivals. The research will be done for five years and its result will be announced officially as a report in 2005. This is an interim report on the actual research which I conducted in last year and this year, with emphasis on the investigation of “Kitakami-michinoku Performing Arts Festival” (Iwate prefecture).